

### 3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

(1) 過去5年間の報告状況

疾患名	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年
インフルエンザ	5,686	11,784	8,409	9,668	8,574
RS ウイルス感染症	1,320	1,302	1,861	1,838	1,679
咽頭結膜熱	458	490	285	582	453
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,449	1,807	1,121	894	1,418
感染性胃腸炎	7,791	9,263	8,820	7,894	7,411
水痘	1,612	1,765	1,101	889	544
手足口病	2,819	151	1,574	184	4,191
伝染性紅斑	729	448	19	47	197
突発性発しん	743	1,037	959	934	862
百日咳	32	19	10	25	17
ヘルパンギーナ	1,216	648	1,056	911	428
流行性耳下腺炎	1,777	720	193	51	179
急性出血性結膜炎	—	1	1	—	—
流行性角結膜炎	19	21	22	15	23
細菌性髄膜炎	5	2	3	1	2
無菌性髄膜炎	11	9	9	1	4
マイコプラズマ肺炎	88	55	17	26	43
クラミジア肺炎	—	—	3	—	—
感染性胃腸炎(ロタウイルス) <sup>1)</sup>			1	32	40

<sup>1)</sup> 平成 25 年 10 月 14 日より定点把握対象感染症に指定された。

(2) 各疾病の報告状況

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

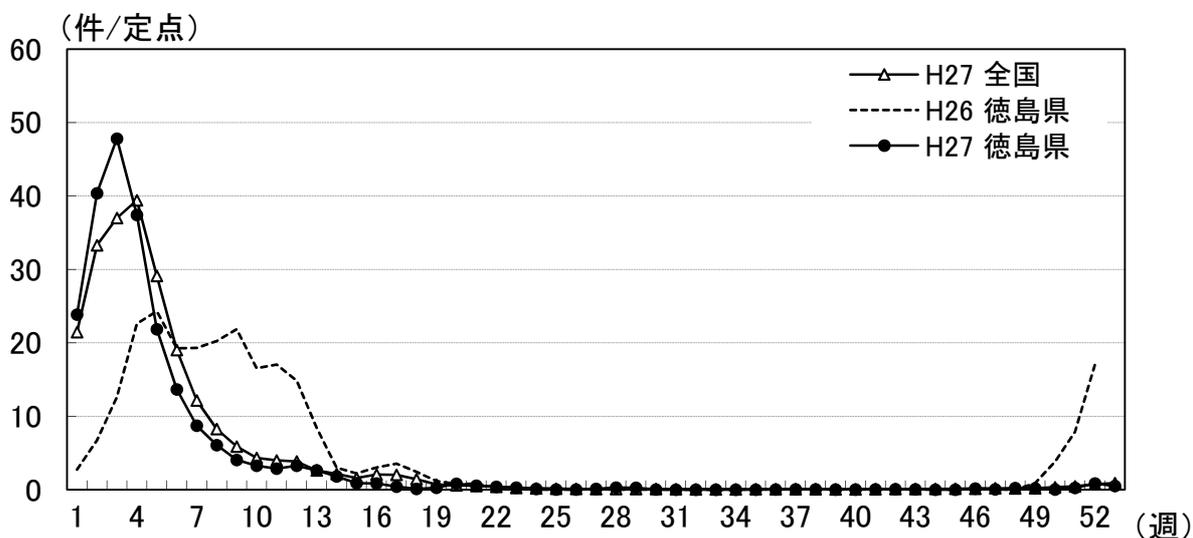
年間報告数は8,574件であり、前年（9,668件）よりやや減少した。

本年の流行前期は、前シーズンより1週早い前年第50週に流行期に入り、第3週まで急増しピーク（47.8件/定点）を迎えた後、減少した。ピークの高さは過去5年間で最も高かったものの、報告数が警報・注意報レベルを超えた期間（第50～8週）は前年（第3～13週）と同じ長さであった。

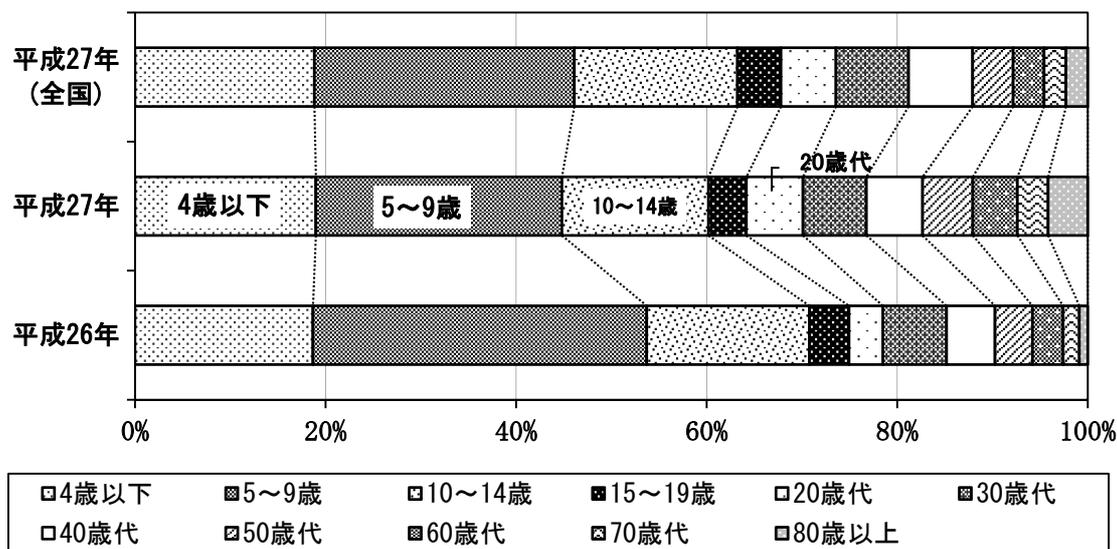
後期流行については、例年より流行開始が遅く、流行開始の目安とされる1.0件/定点を超えないまま、翌年の流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下19.0%、5～9歳25.8%、10～14歳15.4%、15～19歳4.0%、20歳以上35.9%であり、前年と比較して5～9歳の割合が低く、20歳以上の割合がやや増加していた。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



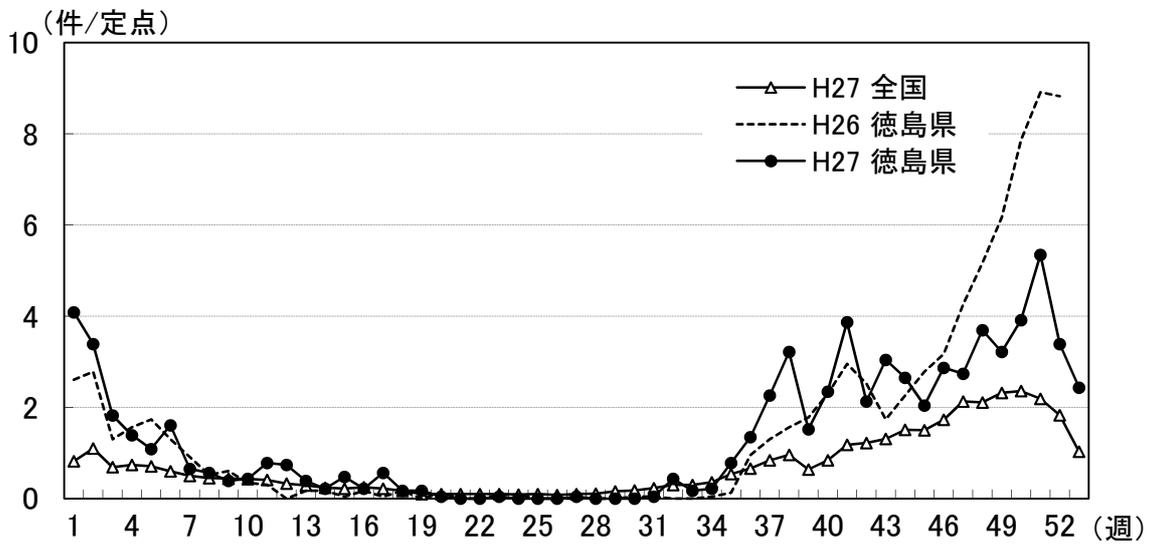
② RS ウイルス感染症

年間報告数は1,679件であり、前年(1,838件)よりやや減少した。

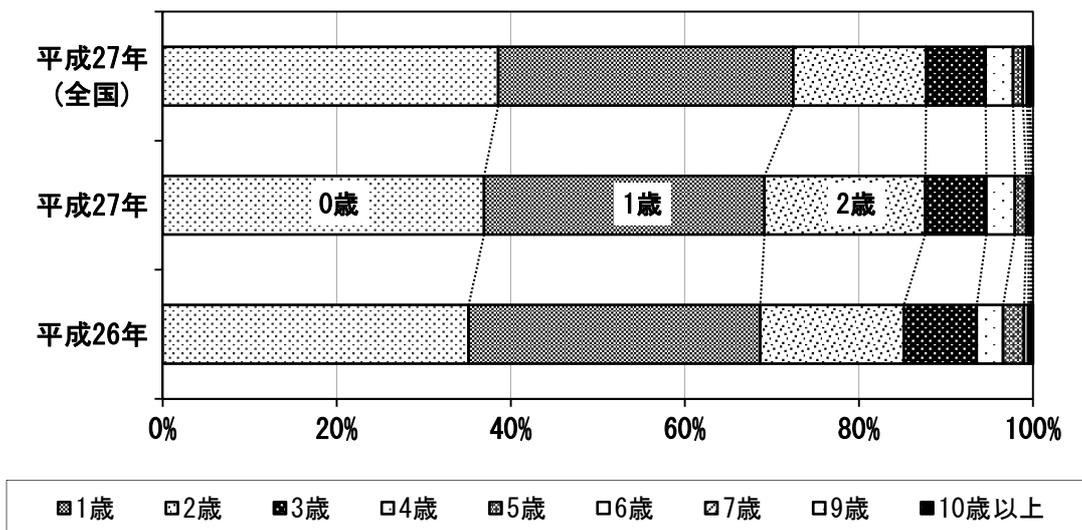
前期は、前年の後期流行を継続したまま、第6週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行は、前シーズン同様に、例年より約2ヶ月早い8月下旬より報告数が増加し始め、第41週に1回目のピーク(3.9件/定点)が見られた。そして第45週より再び増加傾向を示し、第51週に2回目のピーク(5.4件/定点)を迎えるなど、今シーズンは流行期間が長く、全国平均を上回る報告数のまま、翌シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、0歳36.9%、1歳32.2%、2歳18.5%、3歳7.0%、4歳以上5.4%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半(約88%)を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



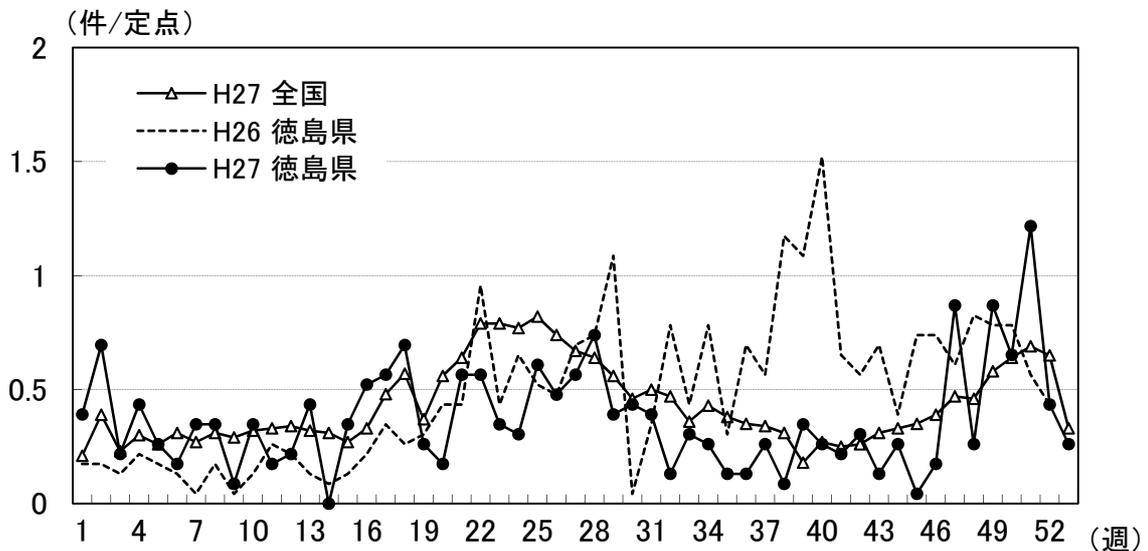
③ 咽頭結膜熱

年間報告数は453件であり、前年（582件）よりやや減少した。

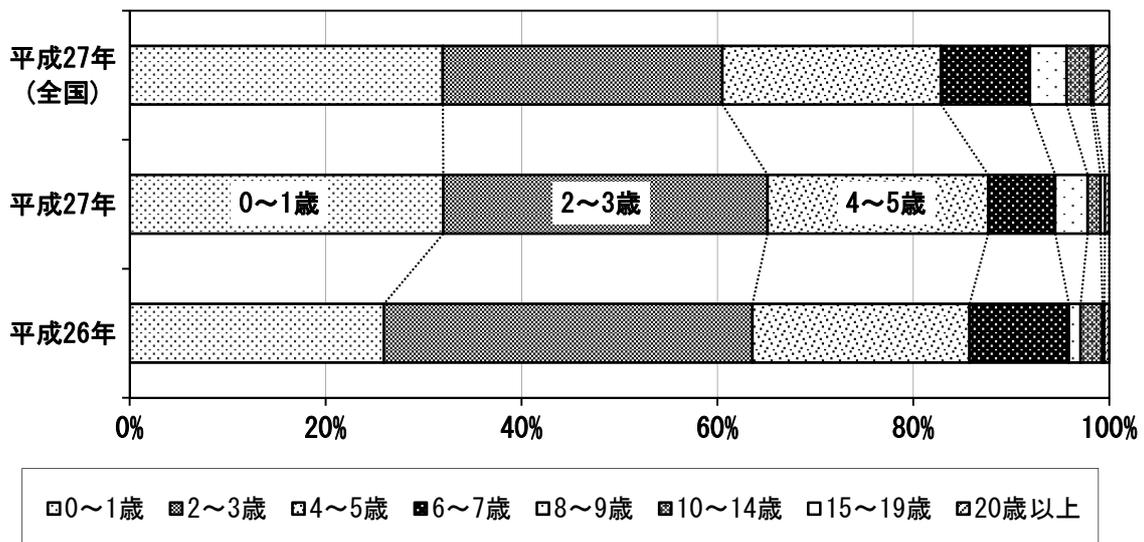
本疾患は、一般に4月ごろから増加しはじめ7～8月にピークを示し、秋にも小規模な流行がみられる年もあるとされる。本年は例年と異なり、4月下旬に県内一部での地域流行や7～8月頃にやや増加した時期はあったものの、報告数に大きな変化なく推移し、晩秋である第46週より増加しはじめ、第51週にピーク（1.22件/定点）が見られた。

本疾患は一般的に4歳以下の乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数も、1歳以下32.0%、2～3歳33.1%、4～5歳22.5%、6～7歳6.8%、8歳以上5.4%であり、5歳以下が約88%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



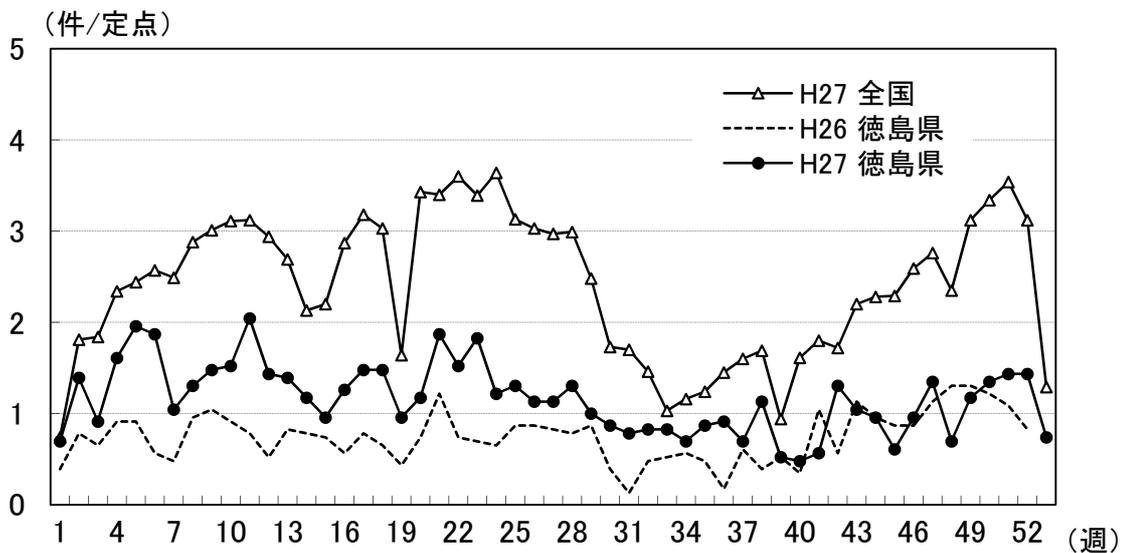
④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は1,418件であり、前年（894件）から約1.6倍に増加した。

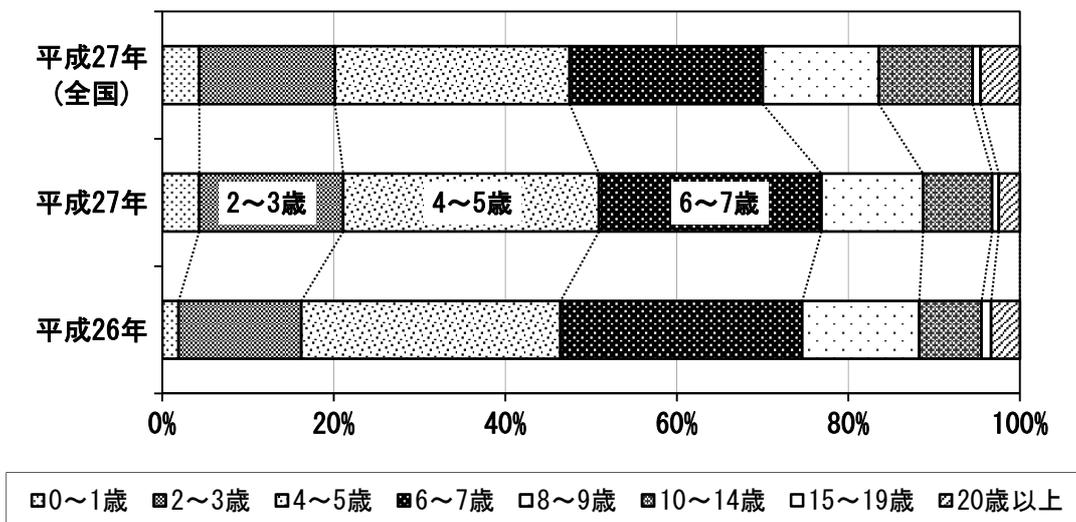
本疾患は、冬期および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、流行の小さかった前年同様のパターンを示し、はっきりしたピークは見られず、年当初から初夏にあたる第28週頃までやや高く推移した後、年末に向かい緩やかに減少した。年間を通じて大きな増減はみられなかった。

本疾患はいずれの年齢層からも報告されるが、学童期小児からの報告が多い。年齢層別の報告数は、0～1歳4.3%、2～3歳16.8%、4～5歳29.8%、6～7歳26.0%、8～9歳11.8%、10～14歳8.0%、15歳以上3.3%と、学童期小児の割合が高かった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



⑤ 感染性胃腸炎

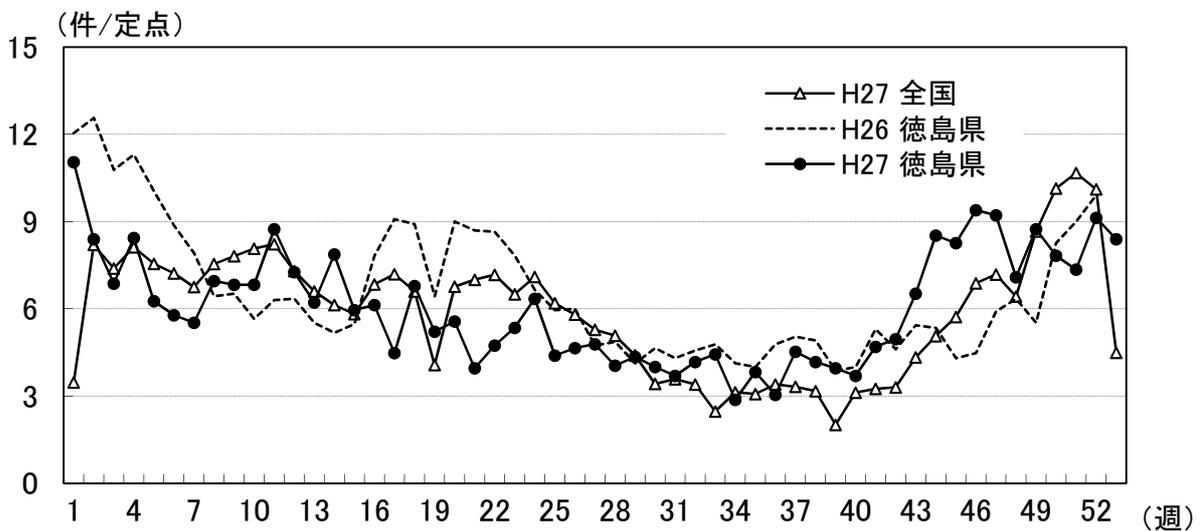
年間報告数は7,411件であり、前年(7,894件)とほぼ同数報告された。

本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め12~1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つなだらかなピークを示し、夏から秋に向けて緩やかに減少するとされる。

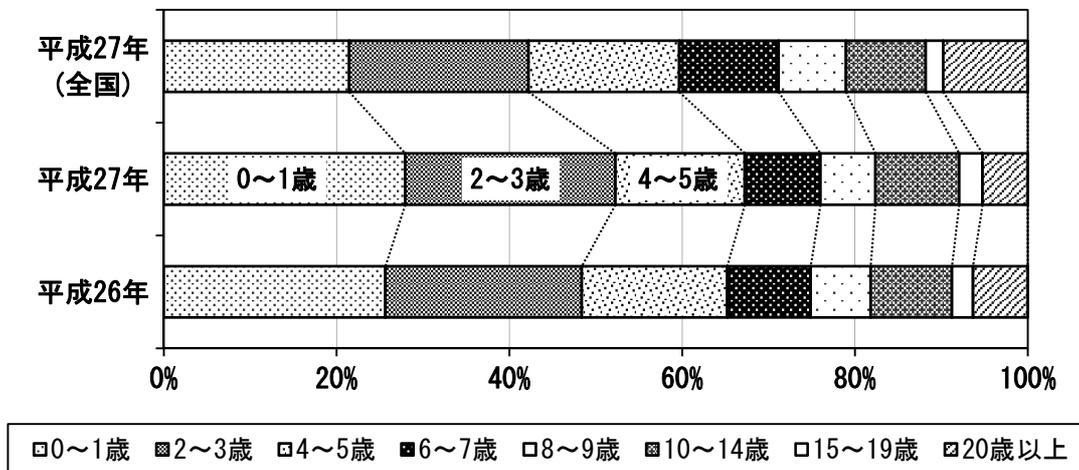
本年の前期流行も、前年の10月頃(第41週)より報告数が増加し始め、第1週にシーズン最初のピーク(11.4件/定点)を示した。その後、第7週より再び増加傾向となり第11週に2回目のピーク(8.7件/定点)をつけ、初夏(第20週)を迎える頃までやや高く推移した後は緩やかに減少し、報告数3~5件/定点前後と低値で推移した。後期は10月中旬(第42週)から増加傾向を示し、11月中旬から年末にかけてやや高い状態が続いたものの、大きなピークは見られないまま越年した。

年齢層別報告数は、0~1歳27.9%、2~3歳24.3%、4~5歳15.0%、6~7歳8.7%、8~9歳6.4%、10~14歳9.7%、15歳以上7.9%と5歳以下の乳幼児が全体の約7割を占めた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



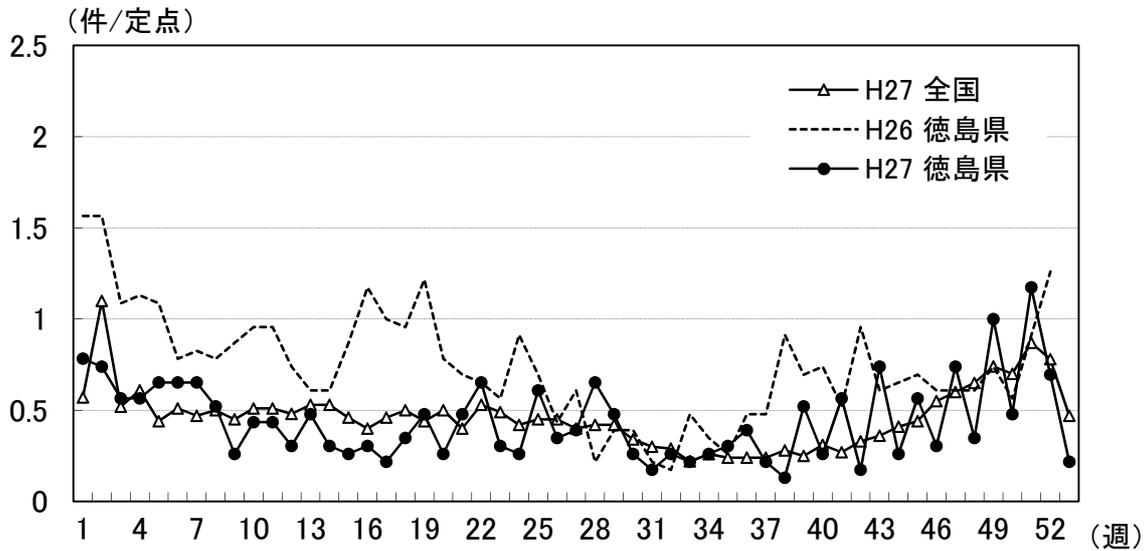
⑥ 水痘

年間報告数は544件と、平成26年からのワクチン定期接種化以降は3年続けて減少し、過去5年間で最も多かった平成24年(1,765件)に比べ約1/3の報告数となった。

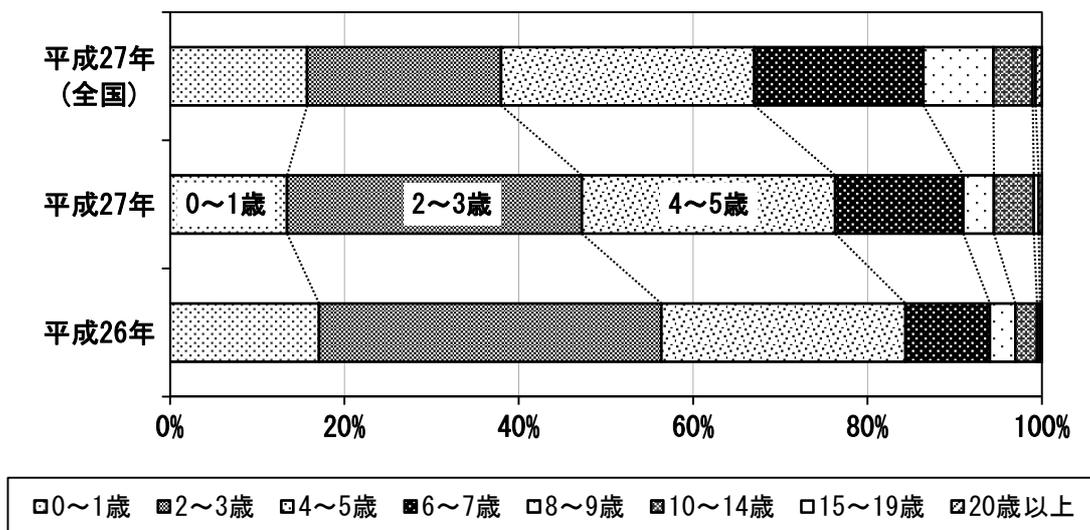
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、秋から冬にかけて増減を繰り返しながら緩やかに増加したものの、大きなピークも見られず、年間を通じて低い報告数(0.1~1.2件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では、0~1歳13.4%、2~3歳33.8%、4~5歳29.0%、6~7歳14.7%、8歳以上9.1%と5歳以下の報告が全体の約76%を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



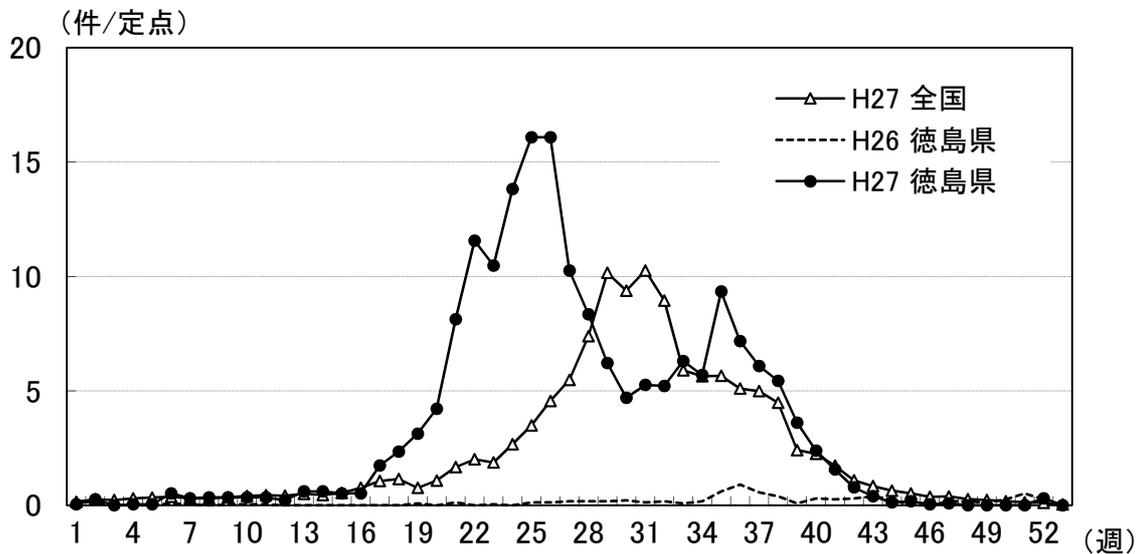
⑦ 手足口病

年間報告数は4,191件と、流行の見られなかった前年（184件）と比べ20倍以上に増加した。

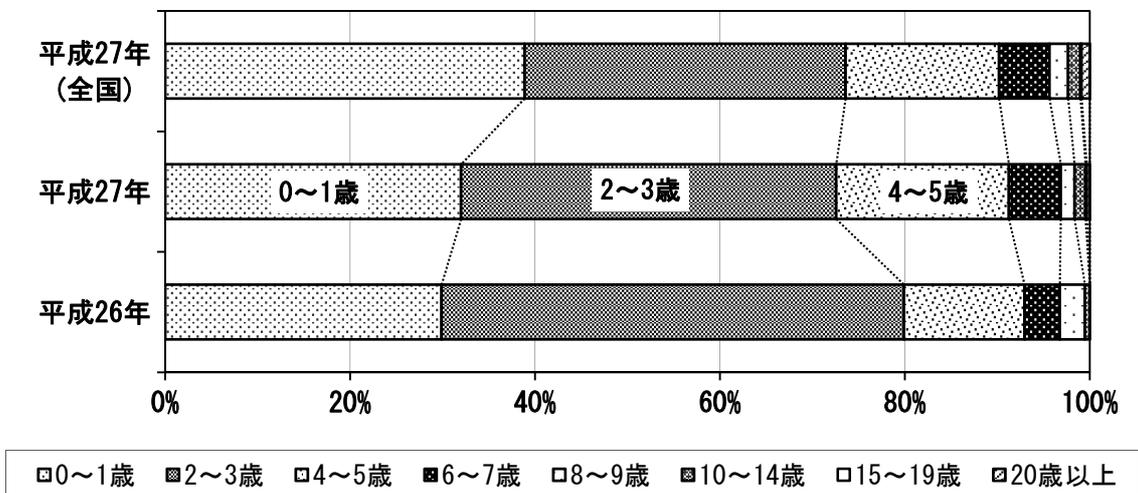
本疾患は夏を中心として流行し、例年7～8月にピークを迎える。本年は、例年よりかなり早い4月下旬より報告数が増加し始め、第20週頃からは急増し、7月上旬（第25～26週）にピークを迎えた。以後、減少傾向を示すものの10月上旬まで高い状態で推移した後、緩やかに減少した。ピークの高さ（16.1件/定点）も高く、警報・注意報レベルを超えた期間（第20～40週）も長く、過去5年間で最も大きい流行年となった。

年齢層別報告数において、例年、5歳以下の乳幼児からの報告が9割を占めているが、本年も、0～1歳32.0%、2～3歳40.6%、4～5歳18.7%、6～7歳5.6%、8歳以上3.1%であり、3歳以下からの報告が約73%、5歳以下では全体の約91%を占めていた。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



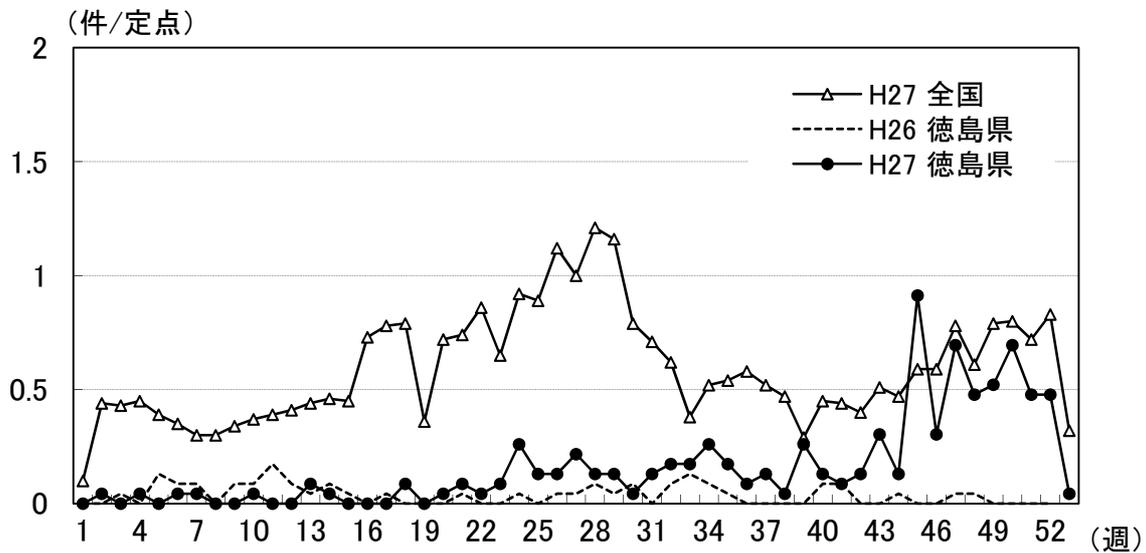
⑧ 伝染性紅斑

年間報告数は197件であった。過去5年間をみると、流行した平成23、24年はそれぞれ729件、448件報告されているのに対し、流行の見られなかった平成25、26年はそれぞれ19件、47件と、年毎により報告数の変化が大きい。

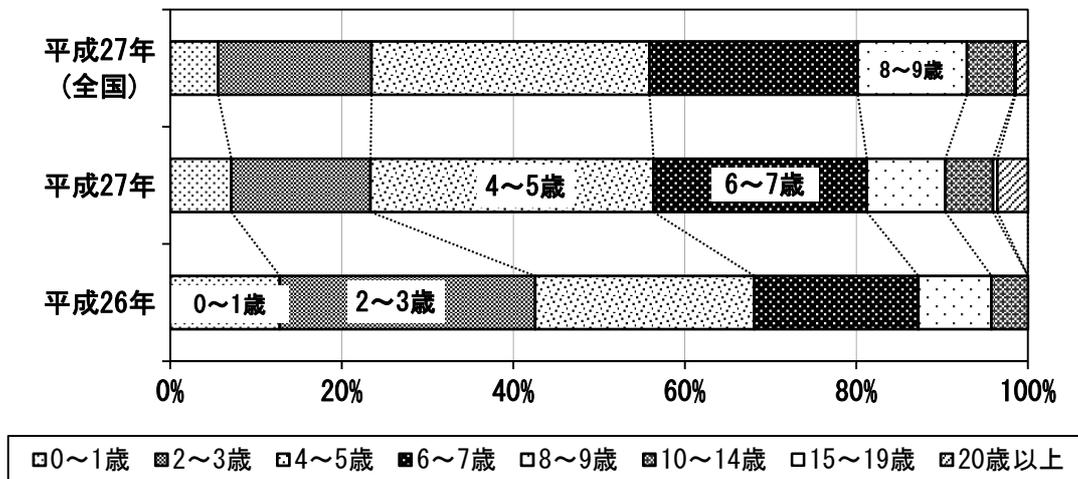
本年は、10月頃までは流行の見られなかった前年同様、定点あたりの報告数は0～0.2件と少なく推移したが、第45週以降増加し、12月頃には県内一部で地域流行も見られるなど、年末までやや高い状態で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳7.1%、2～3歳16.2%、4～5歳33.0%、6～7歳24.9%、8～9歳9.1%、10歳以上9.7%と、4～7歳の割合が高かった。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



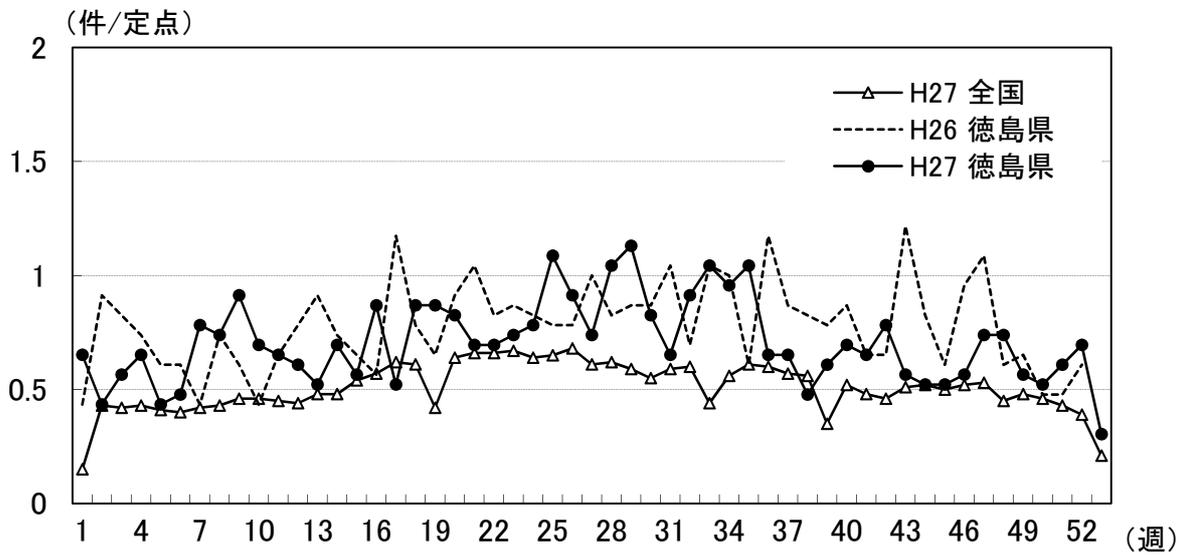
⑨ 突発性発しん

年間報告数は862件であり、前年(934件)からやや減少した。過去5年間をみても743～1,037件で推移し、年毎による年間報告数に差は少ない。

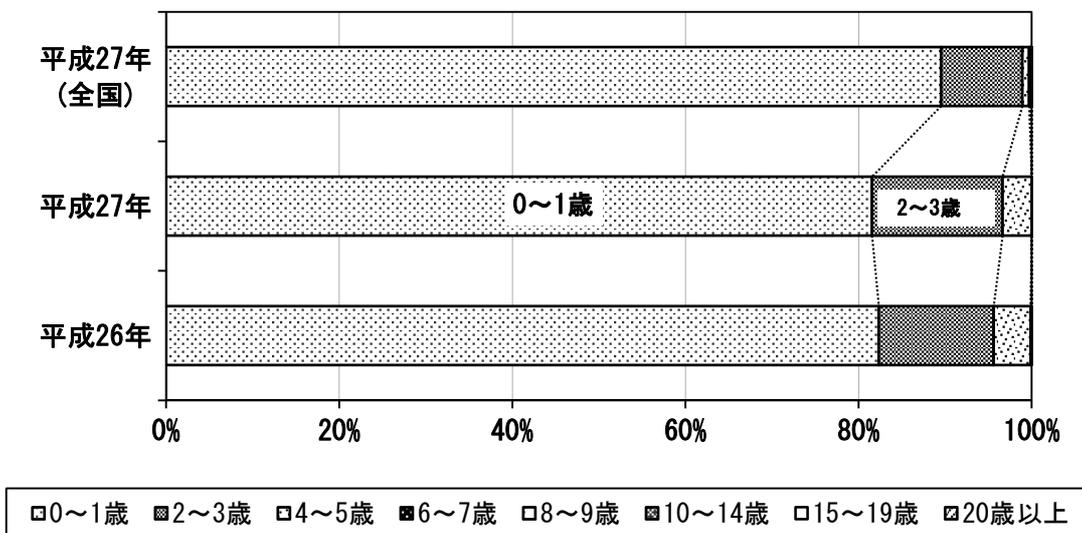
一般に本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、例年と同様に大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.3～1.1件/定点)で推移した。

年齢別では6カ月～1歳代の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。本年も0～1歳81.6%、2～3歳15.1%、4～5歳3.4%と、例年同様、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約97%)を占めた。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数

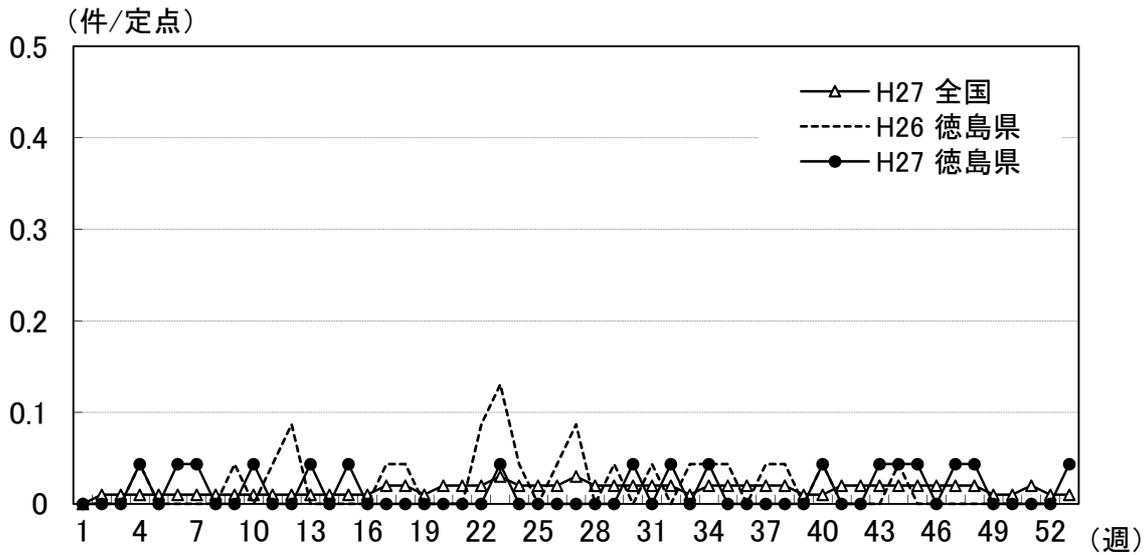


⑩ 百日咳

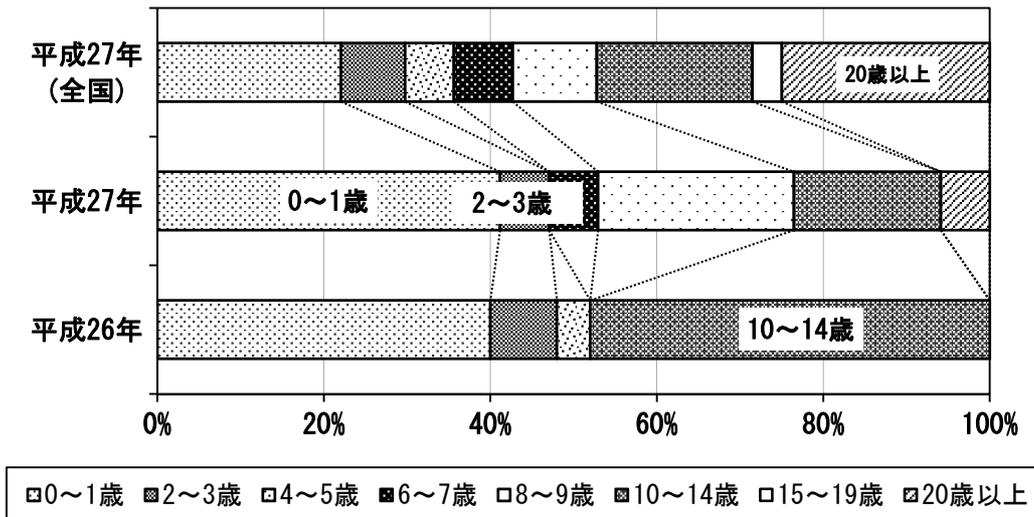
年間報告数は17件であった。過去5年間の報告数は、10～32件で推移している。本年も季節的变化は見られず、報告数は一定の範囲内（0～0.04件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳41.2%、2～3歳5.9%、6～7歳5.9%、8～9歳23.5%、10～14歳17.6%であった。報告数が少ないため単純に比較することはできないが、前年と比べ10未満の割合が増加していた。

百日咳の週別患者報告状況



百日咳の年齢層別報告数



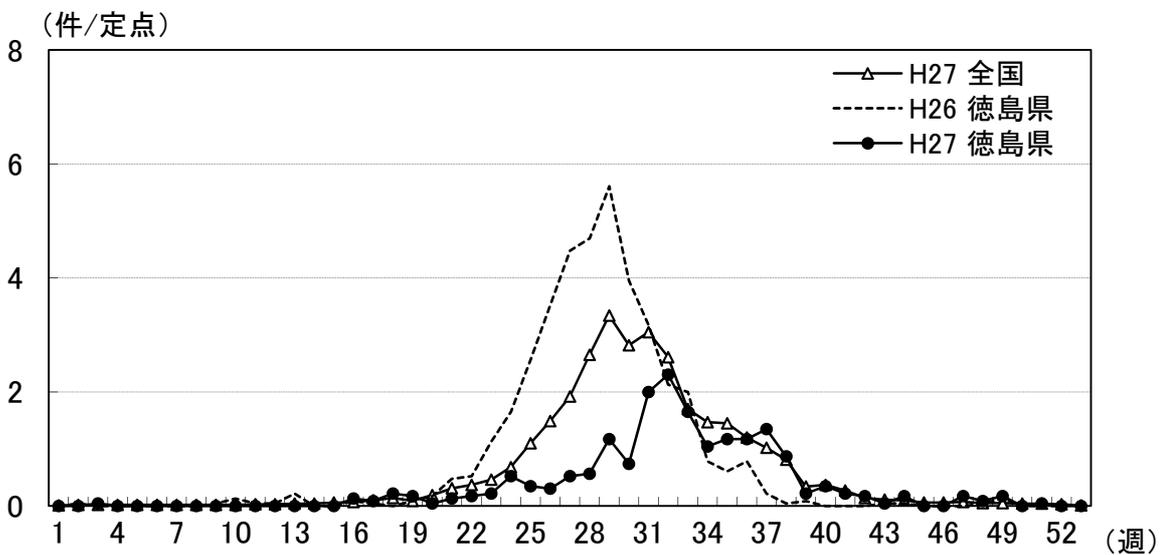
⑪ ヘルパンギーナ

年間報告数は428件と、前年(911件)から約半数に減少した。

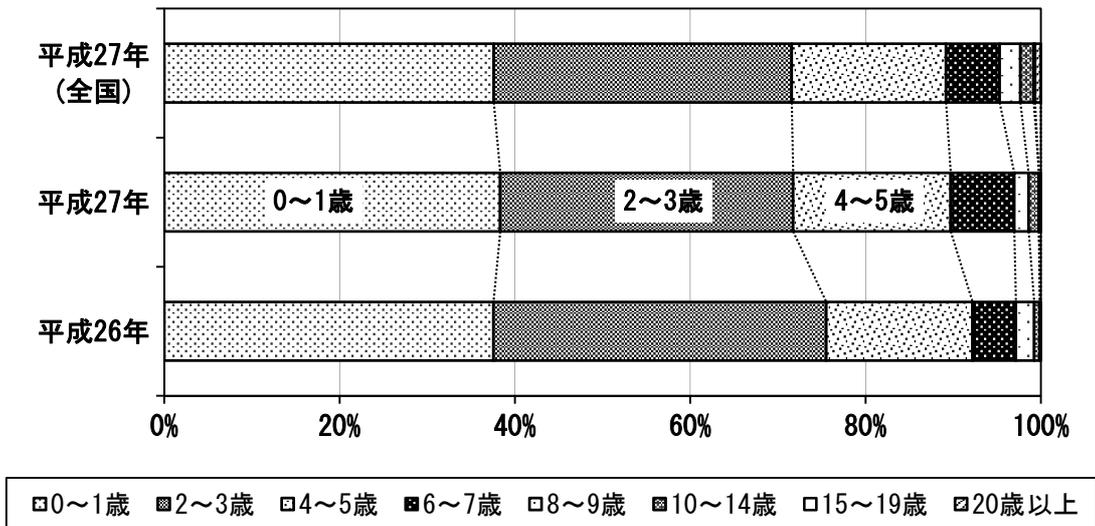
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年の流行パターンは、昨年に比べ遅い6月中旬(第24週頃)より増加し始め、第32週にピーク(2.3件/定点)を示した後、減少した。大きな流行となった手足口病と比べ、増加も緩やかでピークも低く大きな流行は見られなかった。

年齢層別の報告数は、5歳以下が大半(約90%以上)を占め、1歳代がもっとも多いといわれている。本年も、1歳以下38.3%、2~3歳33.4%、4~5歳18.0%、6~7歳7.2%、8歳以上3.0%であり、5歳以下の乳幼児が約9割を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数



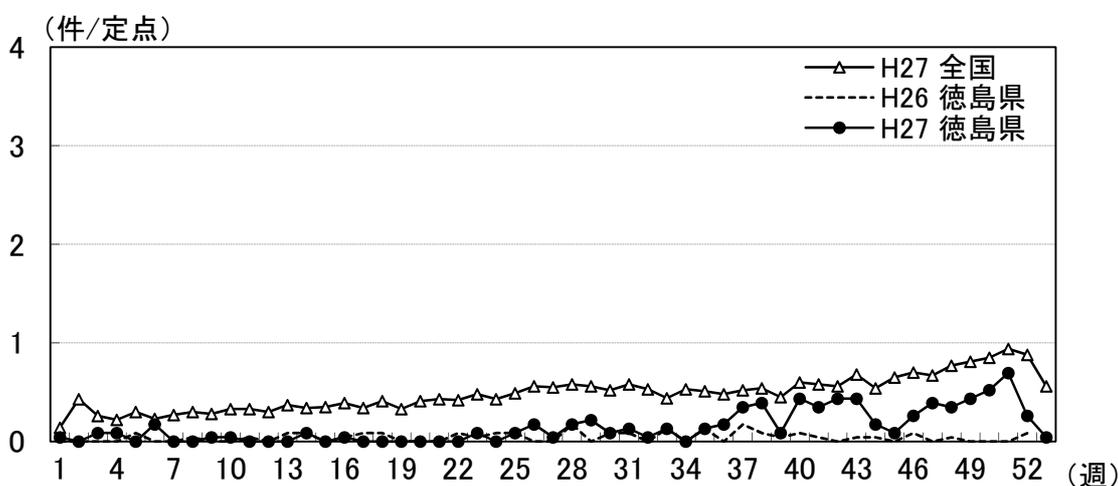
⑫ 流行性耳下腺炎

本年は179件と、前年(51件)から3倍以上に増加したものの、過去5年間で最も報告数の多かった平成23年(1,777件)に比べ1/10程度の報告数であった。過去10年間では平成17～18年、平成22～23年と、数年おきに2年続けて大きな流行が見られている。

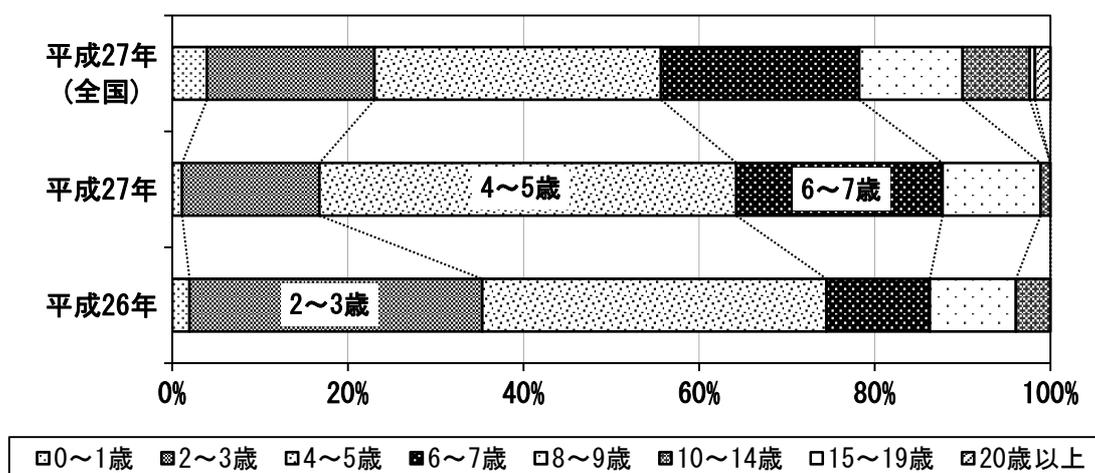
本疾患は、年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて多くなるとされる。本年は、年間を通して定点あたりの報告数は0～0.7件と低値で推移し、季節的な変動は見られなかった。

年齢層別報告数では、0歳から4歳まで年齢を重ねるとともに増加し、5歳以降は年齢とともに減少するとされている。本年も、1歳以下1.1%、2～3歳15.6%、4～5歳47.5%、6～7歳23.5%、8～9歳11.2%、10歳以上1.1%であり、4～5歳の報告数が最も多かった。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



流行性耳下腺炎の年齢層別報告数

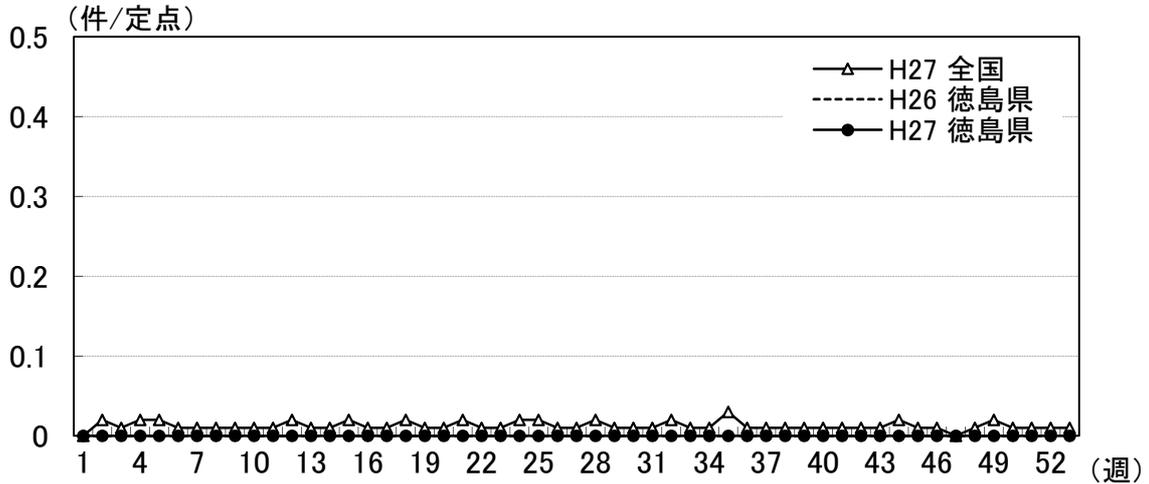


⑬ 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされる。

本年の報告はなく、過去5年間でも毎年0~2件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

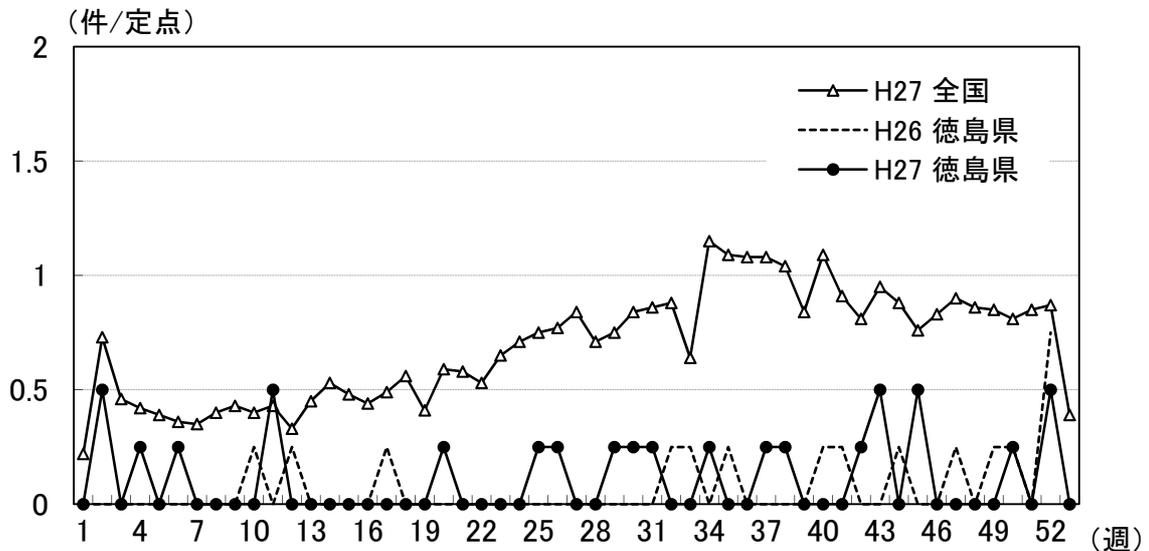


⑭ 流行性角結膜炎

年間報告数は23件であり、前年(15件)とほぼ変わらず、週あたり報告数も年間を通して0.5件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満4.3%、10歳代21.7%、20歳代13.0%、30歳代21.7%、40歳代21.7%、70歳代以上17.4%と幅広い年齢層から報告され、年齢による特徴は見られなかった。

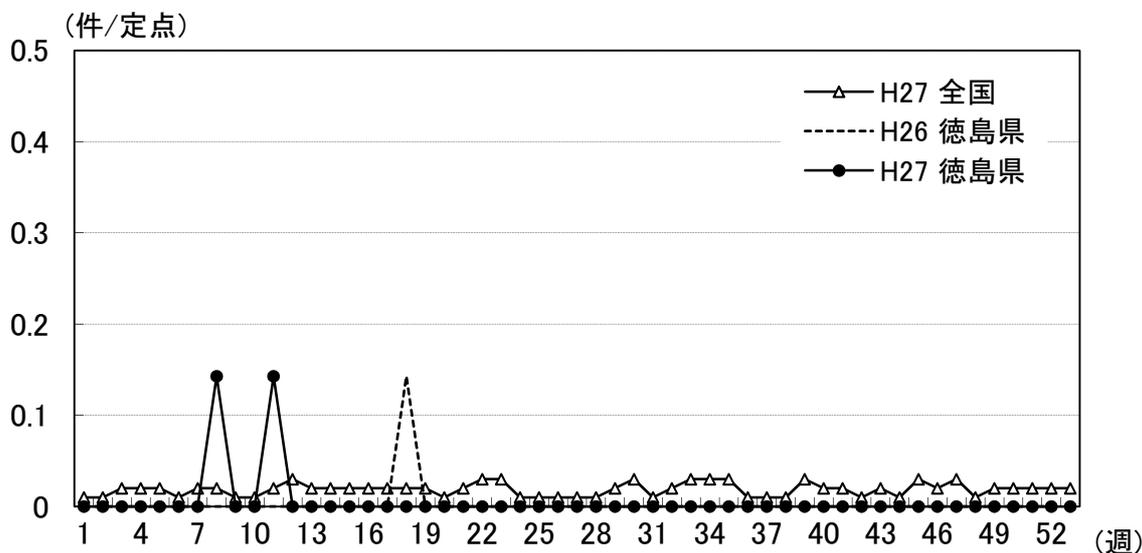
流行性角結膜炎の週別患者報告状況



⑮ 細菌性髄膜炎

年間報告数は2件（5歳未満～50歳代）であり、病原体は、1件からB群溶血性レンサ球菌が検出されている。過去5年間においても、毎年1～5件で推移している。

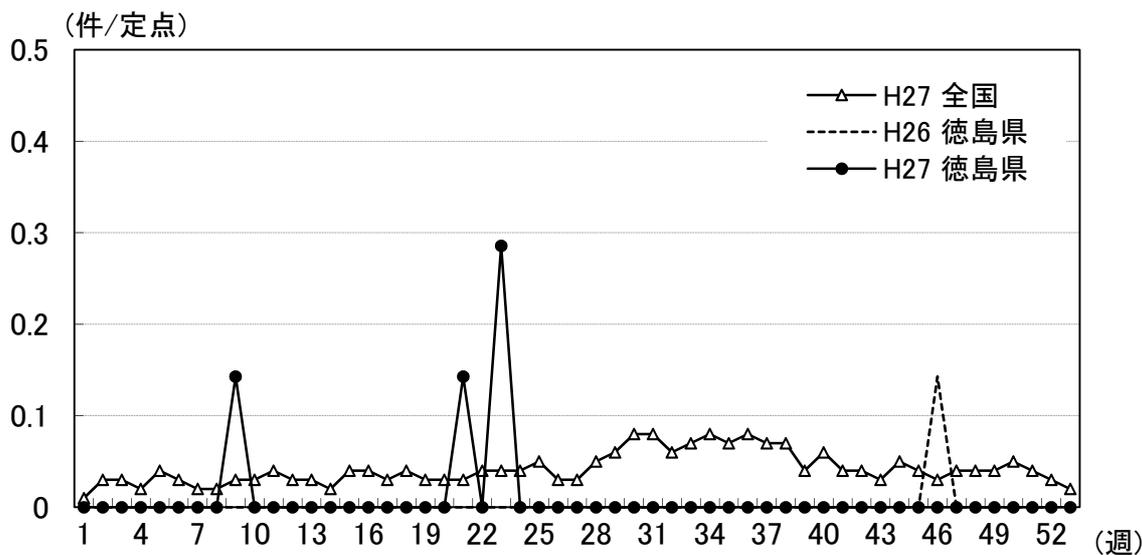
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑯ 無菌性髄膜炎

年間報告数は4件（5歳未満～80歳代）であり、病原体は、1件からクリプトコッカスが検出されている。過去5年間では、毎年1～11件で推移している。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況



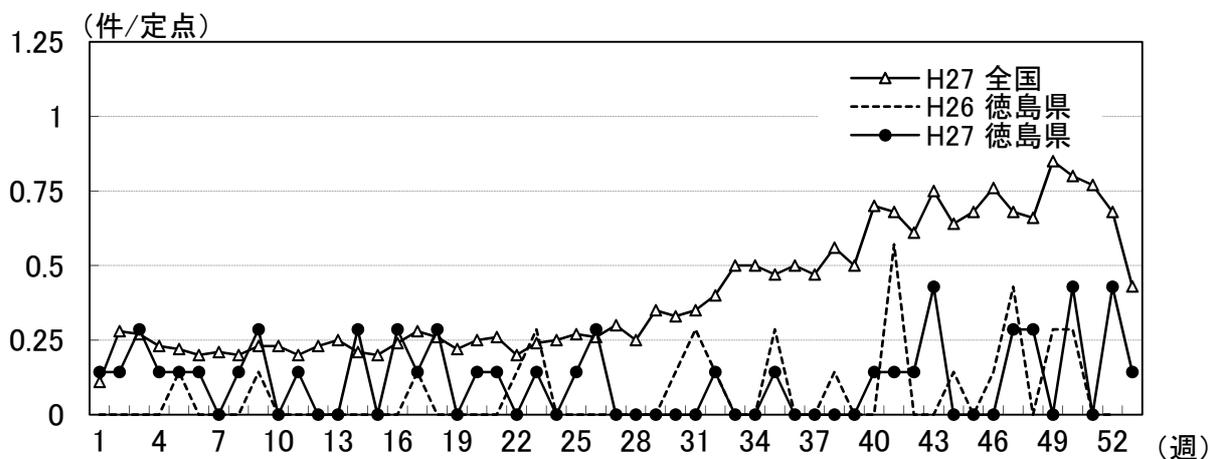
⑰ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は43件と、前年(26件)からやや増加した。過去5年間では、平成23年が88件と最も多かったが、平成24年からは毎年17~55件で推移している。

本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけて多くなるとされる。本年は、季節的な特徴は見られず、年間を通して0~0.4件/定点の低値で推移した。

年齢別では、幼児から成人まで報告されるが、学童期、青年期に多いとされる。5歳未満32.6%、5~9歳28.0%、10~14歳18.6%、20歳代以上20.9%と、幅広い年齢層から報告されたものの、学童期を含む10歳未満からの報告数(約60%)が他の年齢層に比べ多かった。

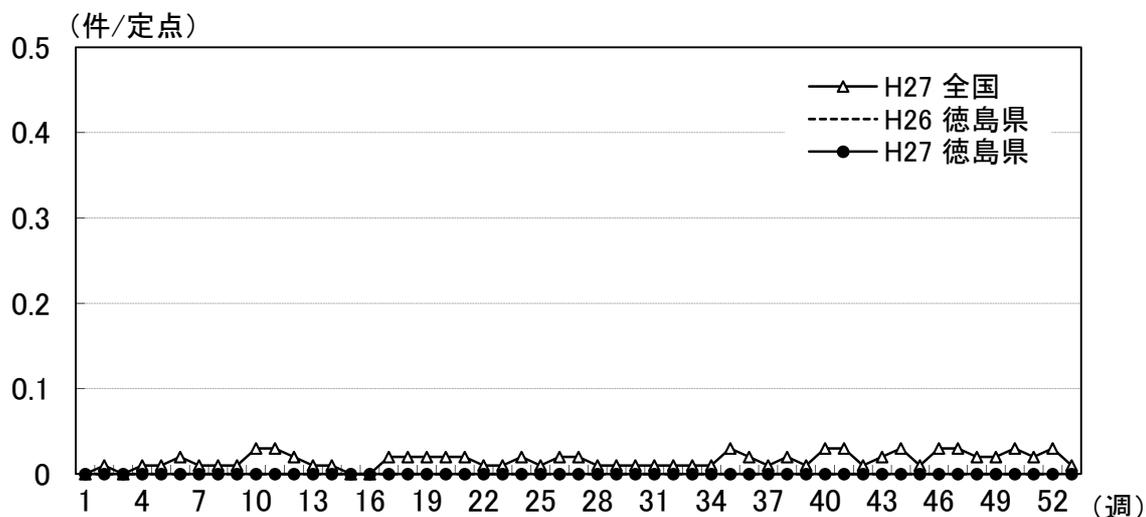
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑱ クラミジア肺炎

今年は昨年に続き報告が見られなかった。過去5年間では、平成25年に3件報告されている。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑱ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平成 25 年 10 月 14 日より基幹定点による届出対象疾患に追加された。

本年は 40 件報告され、前年（32 件）からやや増加した。春先から初夏及び初冬に報告が多かったが夏期は報告されず、季節的な変動が見られた。

年齢層別報告数では、5 歳未満 85.0%、5～9 歳 15.0%で、5 歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

